

## エイジレス社会へ 人生を支える住環境

弘本由香里

### はじめに

はるか昔、直立二足歩行の道を選んだ人類が手に入れた文明の発達。それは、他の動物に比べて極めて未熟な状態で子供を出産し、長期間に渡って親や社会が子供を保育しなければならぬという、リスクと引き換えの産物であったといわれる。

未熟な子供を一人前に育て上げるために、長期に渡るリスクに対応するために、人類は愛情や家族やジェンダーやコミュニティ、その核としての「住まい」という文化を発明したのだと言っても過言ではないだろう。

ところで、人類が手に入れた文明の発達は、やがてもうひとつ、人類特有の産物をもたらした。それが、「老後」である。身体の機能を補う技術や人的な介護によって、人は長い高齢期の生活を、喜びとリスクとともに手に入れることとなった。とりわけ、近代化した社会では、大衆長寿と少産少子によって、人口の高齢化という人口構造そのものの転換に至った。

そこで、かつて人類が自ら選びとった長い保育期のリスクに対して、その課題を乗り越えるための社会と文化を開発してきたように、今、自ら選択した文明の発達、近代化の帰結として到達した高齢社会の課題を乗り越えるために、新たな社会と文化のあり様が模索されていると捉えてもよい。そんな潮流の中で、人と「住まい」の関係のあり方にも新たな展望が求められれている。

### 近代家族を超えて

高齢社会の未来を展望するとき、ともすると私たちは、近代の家族や社会のシステムを基本に議論をしがちである。ところが、社会環境の変化に合わせて文化を開発してきた人類の長い歴史から見れば、今私たちが当たり前のように考えている近代家族の規範やそれに合わせた住まいの形が、決して永続的なものではなく、むしろある時代の必要に応じて現れた一時的なものと考えられるのである。

落合恵美子氏(家族社会学)は、ヨーロッパの近代に起きた二つの出産革命に注目し、「一回は19世紀末頃の通常の意味でのそれ、もう一回はそれをはるかに溯って16世紀か17世紀、晩婚で生涯独身率の高い『ヨーロッパ的婚姻パターン』が成立したときである。」「この二つの時期はちょうど『家型』のシステムと『近代家族型』のシステムの始期にあっている。「人口転換」とは単に狭義の人口の変化のみではなく、家族や社会全体の変動

をも示唆すふくらみをもった概念たりうるものである」と述べている（『近代家族とフェミニズム』1989年）。さらに同氏によれば、ほとんどの人が結婚して子供を持つ、夫婦と子供二、三人という、標準的な家族像が一般化するのには、ヨーロッパでも第二次世界大戦後のことだという。

生産性を優先する近代化の過程では、高齢者よりも生産性の高い若い世代に価値がおかれる。近代家族は、生産性の高い成人夫婦と、将来の生産性をにう子供で構成され、労働力の再生産のための家事と子育てを専らとする主婦が誕生した。高齢者は暗黙のうちに、近代の標準家族の枠組みからははずされてきた。

しかし、今や65歳以上の高齢者は、14歳以下の年少人口を上回るマジョリティである。高齢世帯や単身世帯の増加も著しい。人口構造の転換、そして女性の社会参加や、雇用システムの揺らぎ、産業構造の変化が、かつての規範を引きずる標準家族像とその住まい像を空ろなものにしていることは明らかである。近代家族を超える、新たな枠組みに対応する住まい・住環境の構築が求められている。

つまり、高齢社会の未来を展望する上で最も重要な視点のひとつが、近代家族や住まいの規範にとらわれすぎてしまわないこと。家族という単位からではなく、個人という単位に立ち返って社会や住まいのあり方を考えたい。

### **アイデンティティ・クライシスの回避**

長寿化と少子化は、個人の人生の潜在的モビリティを高める。生涯で産み・育てる子供の数が少なく、かつ人生そのものが長期化するということは、人生のどの時点にどんなライフステージを持ってくるかを、ある程度自分で調整することが可能になるということである。人生のパートナーの選択や協働も、社会規範のみに従って決定されるのではなく、互いにそれぞれのライフコースを尊重する関係性の中で、もっともふさわしい形態が模索されることとなるだろう。生き方の選択の幅が大きく広がっているのである。

しかし、ライフコースの多様化は、個人の人生のモビリティを高める一方で、自らの生き方を自らの価値観で決定していかなければならない厳しさを合わせもつ。子育てや会社への帰属だけをアイデンティティ（自己像）のよりどころにしていたのでは、長期化した人生を最後まで自分らしく全うすることができないという困難もある。

たとえば、阪神・淡路大震災は、自然災害であるとともに高齢社会を象徴する社会災害としてさまざまな現象を引き起こしたが、その根底にも被災者を襲ったアイデンティティ・クライシスがあったといえる。家族、友人、日常生活、仕事、住まい等々、自分と社会をつなぐアイデンティティのよりどころであったものを、一瞬のうちに奪われるというあまりに過酷な経験。クライシスからの回復の速度は、アイデンティティのよりどころとなるリソース（資源）がどれだけ残されていたか、守られたか、再構築できたかによって大きく異なってくる。

自分と社会の関係を失っていくという経験がひとつひとつ増すごとに、人は深刻なアイ

デンティの危機（アイデンティティ・クライシス）にさらされていく。特に、長い高齢期をほとんどの人が生きなければならない高齢社会では、誰もがアイデンティティ・クライシスに陥る可能性を抱えている。マスボリュームの人がアイデンティティ・クライシスを回避することも回復することも困難な社会とは、ある意味で文化的に破綻している社会とさえいえるのではないか。

長い人生に渡ってアイデンティティを自ら更新しつつ支えていくためには、個々の身体的自立や経済的な自立、精神的な自立とその支援が必要となるが、そのすべてに大きく関わり、生活の質を左右する住まい・住環境のあり方が、最も重要なファクターのひとつとなると見てよいだろう。

### **アイデンティティを支える住環境**

個々の人生とアイデンティティをいかに支えていくか。その模索の一例として、デンマークで1970年代末から人口の高齢化への対応について議論を重ね策定された「福祉の三原則」（1982年）がある。福祉政策の最も重要な理念として、「生活の継続性」の保障、「自己決定権」の保障、「自己資源（残存能力）の活用」の三つの柱が打ち出されている。この理念をバックボーンに同国は「高齢者および障害者住宅法」（1987年）を施行。住まい・住環境によって高齢者の生活の質を保障し、自立を支えるという、政策の方向性を明示し、地域の特性に応じた高齢者住宅の供給と在宅ケアサービスの提供が実践されている。

高齢者住宅が様々な世代の暮らす住宅に交じり合っ、快適な住環境を共有できるように配慮されたプラン、高齢者はもちろんその他の居住者も含め、社会との接点を失わないように組み込まれたハード（コモンハウスやコモンルーム）、そこに提供されるソフト（ケアサービス、住宅運営への居住者の参加、様々なアクティビティ、地域活動への参加のバックアップなど）、収入に応じた家賃補助や住宅供給の仕組みなど、それらが一体となって、一人一人の人生を最後まで能動的で輝きあるものとするところこそ、社会的なリスクを回避する有効な文化であるともいえるべき、思想がうかがえる。

また、1970年代、スウェーデンにおける大規模高齢者施設での機械的なケアが引き起こした、入所者の身心状態の悪化（ホスピタライゼーションやアパシー）と、その反省の過程で明らかにされた、住環境における生活の継続性やアイデンティティの確保の重要性もまた示唆に富む例である。

その反省にたって、1980年代以降、スウェーデンで取り組まれた、同分野の研究の蓄積と実践は、生活の質の根本となる、人の心理や行動と環境の関係を探求し、多くの成果を生み出している。なじみのある家具や壁紙が、アイデンティティを安定させること。幼い頃から親しんできた食べ物や飲み物の色や香りが、食欲を増進すること。イスやテーブルの置き方ひとつで、能動的な行為を誘発し得ること。戸外の景色を眺めること、散歩すること、おしゃべりすること、それらのごく日常的な営みが、人間らしい生活のために

くどれほど大切な役割を果たしていることか。などなど、例を上げればきりがないほどである。

日本でもようやく、アイデンティティを支えるという側面から、施設でのケアや環境のあり方が議論され、福祉インフラとして住まい・住環境を位置づける政策の方向性が示されるようになった。しかし、それを可能にする社会システムや文化はこれから築いていかねばという状況である。

### **ネスト(巣)からホームレンジ(行動圏)へ**

人口構造の転換は、近代社会が暗黙のうちにネグレクトしてきた高齢者を、社会のメインストリームに押し出してきている。日本でも、1988年総務庁長官官房老人対策室の「新しい中高年の生活文化を考える懇談会」が「高齢者が多様なライフパターンを維持しつつ、自律して積極的に生活できる社会をエイジレス社会とよぶこととしたい」「来るべき21世紀が明るく豊かな長寿社会となるよう、これまでの高齢社会の暗いイメージを払拭し、このように、新しい中高年の生き方を問い直してみることも有益ではないだろうか」と提言している。

ここで、新しい高齢社会のイメージとして、用いられた「エイジレス社会」という言葉は、1970年代アメリカで用いられ始めたものといわれる。老年社会学が、人口の構造転換の大きな流れの中で、エイジング(加齢)を病気や衰退と捉えることから、人の一生のプロセスそのものと捉え直すに至った結果として生み出された言葉である。さらに生産的なエイジングの意味づけも始まっている。

アメリカのジャーナリスト、キャロライン・バードは、その著書『THE GOOD YEARS Your Life IN the 21th Century』(1983年)の中で、来るべき高齢社会は多様化するライフステージを自分の意志で選択し、豊かに生きる成熟した大人たち(エイジレス)の時代であると予測。積極的にエイジングを捉えなおし、低成長経済社会をリードする価値観をエイジレスに見出しているのである。

冒頭でも述べたとおり、人間は社会環境に合わせて、家族や住まい・コミュニティの形を変えて生きてきた。エイジレス社会の実現は、人と住まい・暮らし・社会の関係の再編を抜きには展望できないだろう。

近代は、均質な労働力を再生産するための、「ネスト(巣)」としての住まいを大量生産していった時代であったといえる。エイジレス社会では、人生の目的やステージに合わせて、自らのアイデンティティの構築に必要な空間やサービスを選択しながら暮らす、ホームレンジ(行動圏)型の住まい方が求められていくのではないだろうか。そこに多様な世代のコミュニケーションと文化の創造があると考えたい。エイジレスとは、年齢による差別をなくすという意味をも持つのだから。

(大阪ガスエネルギー・文化研究所 客員研究員)